都留文科大学研究紀要　第65集（2007年3月）
THE TSURU UNIVERSITY REVIEW, No.65 (Mar. 2007)

〈天稚彦草子〉の二系統の本文の展開とその性格
― 絵巻系・冊子系・赤木文庫旧蔵本・乾陸魏説話をめぐって ―

Origins and Development of the Two Versions of "Amewakahiko Soshi": A Comparative Study

伊東祐子
ITO Yuko

一、はじめに

中世の物語のなかに、「天稚御子（天稚彦）」を主人公とし、蛇婿入り・妻の天界訪問・難題などのモチーフを共有する一群の作品がある。名称は「天稚彦草子」「七夕のさうし」「七夕物語」等と一定しないが、本稿ではこれらのモチーフを共有する作品を〈天稚彦草子〉と称することにする。まず、簡単に内容を紹介しておこう。

長者の下女が物を洗っていると、蛇があらわれ、長者への手紙を託す。手紙は、長者をおどしてその娘を乞うものであったが、三人の娘のうち末の娘が蛇との結婚を承諾する。娘は蛇のもとに運ばれる。ところが、蛇の指示により、娘が蛇の頭を切ると、美しい貴公子があらわれ、二人は幸せに暮らす。ある時、男は用があるため天界に昇るが、戻らない時は天界に尋ねてくるように言い置いて去る。その際、唐櫃を開けてしまったなら、二度と戻れなくなるからと言い残すが、夫の留守中に訪れた姉たちが開けてしまう。戻らぬ夫を探し求めて、娘は天界に昇り、星たちに夫・天稚御子（天稚彦）の居所をたずねめぐり、再会するが、いくつもの難題を課される。しかし、夫から授けられた袖を振りながら「天稚御子（天稚彦）の袖」と言って難を逃れ、月に一度会うことを許されるものの、娘が年に一度と聞き違えたため、天の川を隔て、七夕・彦星として一年に一度、七月七日にあうことになった。

〈天稚彦草子〉の諸本は相当数に及ぶが、本文の系統からは絵巻系・冊子系の二つに大きく分けることができる。絵巻系・冊子系の呼称は、それぞれの系統の本文が絵巻・絵入り冊子の形態をとることが一般的であるという理由から、松浪久子氏[1]によって名付けられたも

のである。両系統の本文は、前述のモチーフを共有するものの、異同箇所は少なくない。また、絵巻系と冊子系とでは本文の長さがだいぶ異なり、冊子系は絵巻系のほぼ四倍もの長さを有する。両系統の関係について、松浪氏は「古風素朴な本文をもつ絵巻系」と「読物的に潤色を加えた本文をもつ冊子系」と捉え、絵巻系から冊子系へという方向を示された。一方、勝俣隆氏[2]は絵巻系の本文と絵（挿絵）の齟齬を論拠とし、「むしろ冊子系の先行本文が省略されて絵巻系本文になったと見た方が良い」と、冊子系から絵巻系への方向を示された。筆者は前稿[3]において、勝俣論文でとりあげられた絵巻系の本文と絵の齟齬の箇所について再検討し、〈天稚彦草子〉は絵巻系から冊子系へと展開したものと推定されることを述べた。本稿では、それらの異同箇所を含め、両系統の本文全体を対象とし、絵巻系から冊子系へと展開する本文の様相を検討するとともに、それぞれの本文の性格について改めて考えてみたいと思う。また、絵巻の形態を有しながらも、冊子系本文を有する赤木文庫旧蔵本の図様についてもとりあげたい。さらに、古今和歌集の中世期注釈書『古今集注』付載の「乾陸魏説話」（巻四・秋上・一七五番歌の注）と〈天稚彦草子〉の関係についても、あわせて考えたいと思う。

二、絵巻系と冊子系の諸本について

〈天稚彦草子〉諸本のうち、筆者が調査の対象としたものは以下のとおりである。

○絵巻系

ベルリン国立東洋美術館蔵『天稚彦草子』（下巻のみ）

東京国立博物館蔵『天稚彦草子』

サントリー美術館蔵『天稚彦物語絵巻』

専修大学図書館蔵『七夕のさうし』（アンベルクロード氏旧蔵）

○冊子系

静嘉堂文庫蔵『七夕物語』

大阪府立中之島図書館蔵『七夕』

京都大学文学部美学研究室蔵『たなばた』

赤木文庫旧蔵『七夕の本地』（現在は安城市歴史博物館所蔵）

○乾陸魏説話

宮内庁書陵部蔵『古今和歌集注』付載「乾陸魏説話」

国文学研究資料館蔵初雁文庫（乙）本『古今和歌集注』付載「乾陸魏説話」

京都大学蔵『古今集注』付載「乾陸魏説話」

次に、絵巻系・冊子系諸本の系統内での異同状況等を簡単に記しておく。

絵巻系諸本[4]は本文の異同はごく小さい。ベルリン本は、「詞　当今宸筆」「絵　土佐弾正藤原広周筆」という奥書を有し、秋山光和氏[5]により後花園天皇を中心とする室町初期（十五世紀前半）の宮廷サロンで作られた作品と推定されたもので、冊子系を含め〈天稚彦草子〉の最も古い作品である。サントリー本・専修大学本は、ベルリン本の「写本」であろうとされている。ベルリン本は、上巻を欠くため、本稿への絵巻系本文の引用は、上巻は国博本に、下巻はベルリン本による。これは、松本隆信氏「室町時代物語大成」第二巻所収の本文である。

冊子系諸本は、絵巻系よりも本文異同が若干多く認められるが、

絵巻系と対立するような大きな異同箇所では、冊子系としてほぼ共通している。静嘉堂本[6]と中之島本[7]はかなり近く、これらの本文に比して京大本[8]は自由な表現がみえ、物語の末尾で、長者の三人の娘の姉二人が后となったとするなど独自な箇所をもつ。本稿への冊子系本文の引用は、「室町時代物語大成」第八巻にも所収の静嘉堂本による。ちなみに、赤木文庫旧蔵本[9]は絵巻の形態をもち、絵の図様も絵巻系と八割ほどが重なるものの、本文は、絵巻系と冊子系が対立する箇所では、冊子系と一致あるいは近似しており、明らかに冊子系と認定される。ただし、他の冊子系諸本に比べて和歌が四首多いなど独自な箇所もみえる。本稿への赤木本の引用は、「室町時代物語大成」第八巻による。

乾陸魏説話は京大本[10]が後半を欠く。書陵部本[11]と初雁文庫（乙）[12]本の異同は、仮名遣いの相違などがみられる程度で、ごく小さい。本稿への乾陸魏説話の引用は、書陵部本（筆者翻字）による。

三、絵巻系と冊子系の本文の検討

まず、絵巻系と冊子系の本文の関係について、大きな異同箇所を取り上げながら検討していきたい。[13]

絵巻系になく、冊子系のみが有するという異同箇所は少なくないが、冒頭・末尾の一節も冊子系のみにみえる。（以下、引用に際しては、漢字などの表記や、諸本により一部本文を改めた場合がある）。

【例1】

〈冊子系〉（冒頭）それ、我が朝は、神代よりはじまり、神武天皇を人皇のはじめとして、国土の万民みな、この末につづけり。されば、神国なれば、仮に人間と生まれ給ふといへども、また神と現じ諸人の災ひに代はり給ふこと、ありがたき御誓ひなり。（五一一頁）

（末尾）そもそも、天稚御子と申すは本地勢至菩薩なり。姫君は如意輪観音の、仮に人間と現れ、かかる不思議のありさまを知らしめんための御方便なり。・・・三界広しといへども、我が朝は神国なれば、かかる不思議も多かりけり。（五二九～五三〇頁）

冊子系は、我が朝は神国であり、神が仮に人間と生まれたとしてもまた神と現ずることがある、と語り起こされるが、それは末尾の、天稚御子の本地は勢至菩薩であり、姫君は如意輪観音が仮に人間と現れたものであること、「我が朝は神国なれば、かかる不思議も多かりけり」と呼応する。つまり、冊子系は本地物の物語の枠組み（神仏→人間→神仏）をもつ。冊子系では、姫君が天界に昇る時、その情景を目撃した人物が「天人の天降り、ただいま天上にあがらせ給ふ」（五二〇頁）と口にするが、冊子系の冒頭末尾とひびきあう。

さらに、右の冒頭の一節につづき、冊子系のみ、長者の三姉妹のうちの三番目の娘について次のように語る。

【例2】

〈冊子系〉妹はことに色好み深く、つねの言ぐさにもいひたはぶれける。「それ、人の契りを聞くに、思ふには別れ、思はぬにも添ふならひ、さらに心得がたし。たまくあひあふ仲は、いつしか定めなき世のならひ、盛者必滅のことはりを逃れず。先立つも心憂し、また遅れて一人ものを思はんもなを悲し。さればとて、二人の夫にまみえむこと、まことの人

とはいひがたし。ただ、よろづよまでも変はらぬ契りこそ、あらまほしけれ」と明け暮れ願ふといへども、そのかひあるべきにもあらず、心にまかせず年月をぞ送りける。

（五一二頁）

冊子系本文では、「妹はことに色好み深く」「人の契り」のはかなさ、定めなさを嘆き、「よろづよまでも変はらぬ契り」つまり永遠に変わらぬ夫婦の関係を願っていたという。三番目の娘のこうした設定は、冊子系の物語構造を考えるうえで見過ごせない。のちに、天稚御子が、娘と結婚した理由を、娘の「心ざしの切なること」（五一七頁）にひかれたからと答えているのも、この娘の願いと呼応している。また、物語の最後で娘は天稚御子と毎年七月七日に逢うことになるのだが、年に一度となった意味について、冊子系では「あまり睦まじき仲は終に別れのもとひ」（五二九頁）であり、末永く二人の関係を続けるためには年に一度がふさわしいことを人間に示そうとしたためと語る。冊子系は、娘が「変はらぬ契り」を求め、それが叶えられた物語と読むこともできるだろう。[14]

以上の冊子系本文をもたない絵巻系では、次のように、大きな蛇が突然あらわれ、長者をおどし娘との結婚を要求する、という人身御供譚のスタイルで語り起こされる。さらに、その大きな「くちなは」の姿も、絵巻系と冊子系とでは描かれ方が異なる。

【例3】

〈絵巻系〉昔、長者の家の前に、女、物洗ひてありける。おほきなるくちなは、出で来ていふやう、・・・くちなは、口よりふみをはき出だして、

（一三頁）

〈冊子系〉ある時、長者の前なる川に出て、召使ひける女、物を洗ひけるに、何となき、いつくしきくちなは出でて、ほそき声音をあげていふやう、・・・・くちなは・・・口のうちより、いつくしき玉づさをはき出だし、

（五一二頁）

絵巻系「おほきなるくちなは」と冊子系「いつくしきくちなは」の異同は、一見すると小さな異同のようではあるが、絵巻系の十七間の釣殿をもいっぱいにしてしまうという大きな蛇は、手紙を託された女だけでなく、長者たちにも、そして享受者にも恐怖心をいだかせる存在である。対する冊子系「いつくしきくちなは」は、大きさではなく蛇に対する評価が入った語である。「いつくし」は、本来は神や天皇などのおごそかな様子を形容する語であるが、室町時代以降には「うつくし」と混同して用いられ、赤木本では「うつくし」とある。加えて、冊子系では蛇の声まで「ほそき声音」と形容されている。網野善彦氏[15]は「神の声、人ならぬものの声が微音と考えられていたことは、まず間違いない」といわれるが、蛇の〈細い声〉は網野氏のいう神の声〈微音〉を連想させる。単純に「大きな蛇」とする絵巻系に比べ、冊子系の「細い声で語りかける美しい蛇」という設定は、この蛇との結婚が、実は天人である天稚御子との結婚であることを暗示するものともいえよう。冊子系「いつくしくき玉づさ」も一連の異同と思われる。

天稚御子をさがし求めて、娘が昇天する方法も絵巻系と冊子系とで大きく異なる。

【例4】

〈絵巻系〉男、いふやう「西の京に女あり。一夜ひさごといふもの持ちたり。それに物をとらせて昇れ。・・・」といふ。・・・三七日待てども見えざりければ、いひしままに西の京へ行

きて、女にあひて物ども取らせて、一夜ひさごに乗りて空へ昇らんと思ふに、・・・いと悲しく、「今は故郷見るまじきぞかし」と、返り見のみせられて、

あふこともいさしら雲の中空にただよひぬべき身をいかにせん　（一五～一六頁）

〈冊子系〉「よし、偽りなりとも仰せにまかせてたづね見ばや」とおぼしめし・・・たどり〳〵と行き給ふ。夕顔の花、咲き乱れ、色香をもえならず見えければ、しばし立ち寄り給ひて、

契りしはいかにむなしき言の葉の花なつかしき君の夕顔

と、うちながめ給へば、そこととなく一むら立ちのぼるを見給ひて、

君が住む天路と聞けばなつかしや煙となりてあふよしもがな

とて、空をのみながめておはしければ、かの煙、姫君の前に近づき、をのづから虚空にあがらせ給ふ。　（五一九～五二〇頁）

絵巻系では、娘は、天稚御子が指示したとおり、西の京の女から手に入れた「一夜ひさご」にのって天界に昇る。「ひさご」とは、ウリ科の植物の総称で、瓢箪や夕顔などをさすが、ともに類似した白い花をつける。「一夜ひさご」とは、一晩で蔓が天上に達するほどの不思議な力を持った植物として登場している。〈図1〉のように、絵巻系の図様[16]には、いっぱいにからんで蔓をのばし白い花をつけ天に向かって伸びている「一夜ひさご」（夕顔）が描かれ、その蔓の先端に娘は立ち、足元からは昇天の方向を示す白い雲が立ちのぼっている。絵巻系の「一夜ひさご」は、昔話「天人女房」において、「夕顔、瓜、豆などの成長の早い植物の蔓」が天界へ昇るための手段であることと共通する。[17]

冊子系では、天稚御子は天界にたずねてくるよう言い残すが、具体的な方法については語らない。御子との再会を願う娘は、夕顔の花の咲き乱れている所にさしかかる。御子を思って和歌を口ずさむと、どこからともなく煙が立ちのぼり、娘が「君が住む天路と聞け

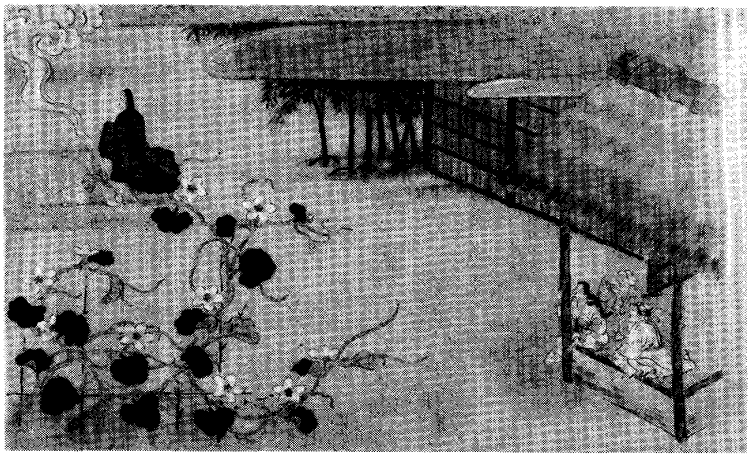

図1　サントリー美術館蔵

図2　赤木文庫旧蔵・安城市歴史博物館蔵

ばなつかしや煙となりてあふよしもがな」と和歌をくちずさむと、「煙」が近づいてきて、娘を虚空に連れていってくれたという。冊子系では、「一夜ひさご」は見えず、「夕顔」の花となっているが、この「夕顔」は、娘を天界に連れていってくれるものではなく、不思議な「煙」が立ちのぼる場所に咲き乱れる花とされている。冊子系の本文にとって、そもそも「煙」が立ちのぼるこの場所が「夕顔の花」咲く所である必然性はどこにあるのだろうか。[18] 絵巻系と冊子系の前後関係を考える時、美しい「夕顔の花」のもとで「煙」によって天界に連れていってもらったという冊子系の本文から、「煙」の存在を消し、美しい花として配されている「夕顔の花」を、一晩で天にまで達する不思議な力を有する「一夜ひさご」として絵巻系本文が書き改められたと考えるのは難しい。冊子系の「夕顔」の存在は、絵巻系「一夜ひさご」の痕跡とみなせるだろうし、あるいは絵巻系の図様をもとに生み出された本文である可能性もうかがわせる。

実は、冊子系の本文でありながら絵巻の形態をもち、図様も絵巻系と八割ほどが重なるという赤木本が、この異同箇所を考えるためのヒントを与えてくれるのではないかと思われる。赤木本のこの図様〈図2〉は、大月千冬氏が「ほぼ忠実に踏襲している」[19]といわれるように、絵巻系のサントリー本の図様〈図1〉と比べてみるとかなり近いことがわかる。ところが、それぞれの絵巻を実見してみると、微妙な、しかし看過できない違いを感じざるをえなかった。サントリー本〈図3〉では、娘が「一夜ひさご」の蔓の先端に両足をしっかり乗せて、今まさに天上界へと昇っていく途上の図として描かれているのに対して、赤木本〈図4〉では、娘の足は夕顔の蔓に接しておらず、蔓との間には明らかな空間がある。また、絵巻系では視点を高くとり、空中から見下ろしたかたちで、娘よりかなり小さく描かれた西の京の女たちが、赤木本では大きめに描き出される。そのため赤木本では、娘は天界に昇っていく途上というよりも、夕顔の生い茂っている傍らの大地に立ち、足元には煙が立ちのぼり、煙によってこれから天界に昇る様子を描いた図と思わざるをえない。冊子系本文の立場にたてば、赤木本の図様は本文と対応すべく、絵巻系の図様に最小限の手が加えられた結果と推定される。しかしまた、赤木本の図様は、絵巻系の図様――娘を天界に連れていって

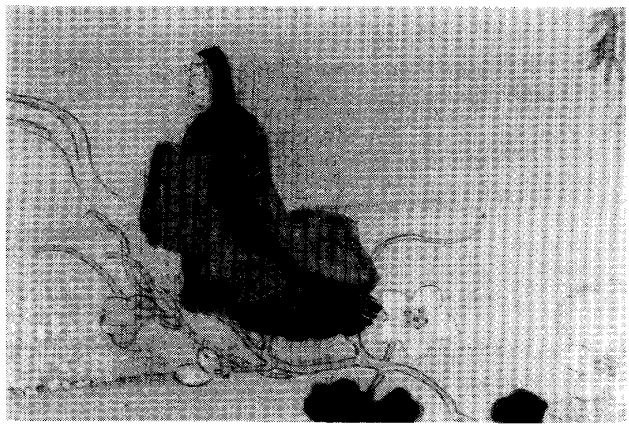

図3　サントリー美術館蔵

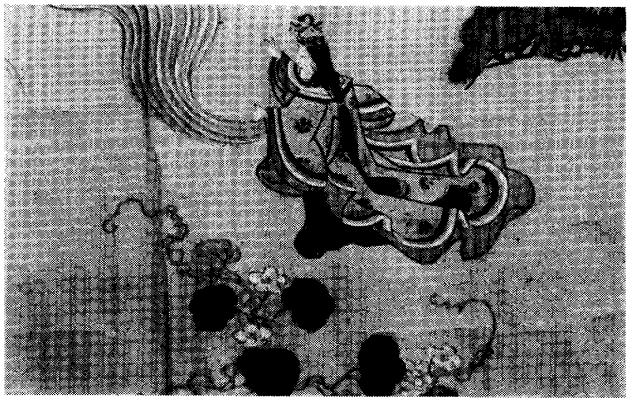

図4　赤木文庫旧蔵・安城市歴史博物館蔵

くれた一夜ひさご（夕顔）と、昇天の方向を示していた白い雲――を、美しい花と、天界に連れていってくれた煙として読み変えたことになるわけであり、煙により昇天するという冊子系本文が生まれるに際して、図様のよみかえがあった可能性を裏付けているともいえるのではないか。

天界に昇った娘は、天稚御子との再会を果たすが、二人を妨げ難題を課す存在として、絵巻系では天稚御子の父である鬼、冊子系では父ではなく鬼神となっている。

【例5】

〈絵巻系〉父にて侍る人は、鬼にて侍る。かくておはすると聞きては、いかがしきこえん、とわびしき」との給ふに・・・「さては、わが嫁にこそ。つかふ者も侍らぬに、たまはりてつかはん」といふに、「さればこそ」といと悲し。（一六～一七頁）

〈冊子系〉須弥の半腹を領ずる、そくさん王とて鬼神あり。・・・このことを聞き、天稚御子の前に来たって、まなこをいらてていひけるは、「いかなれば、下界の人間を、これにはとどめ給ふぞや。天上と申すは、仏の国にて侍れば、凡夫の身を変へずして来たること、開闢よりこのかたその例なし。急ぎ、おっくだし給へ」といかりければ、（五二三頁）

そもそも難題譚は、求婚者が婿としてふさわしいかを試すために、親権者から婿に課せられる試練がもととなっているという。[20]〈天稚彦草子〉では、婿ではなく嫁に課せられているが、絵巻系のように「父」が課すというのが自然であるだろう。やがて、難題をクリアした娘に御子との結婚を許可したのは、絵巻系では父である鬼だが、冊子系では天稚御子自身となっている。実は、冊子系の天稚御子は、鬼神「そくさん王」に苦しめられる娘に対して、「御身、不浄なる身なれば悪魔の障碍逃れ給はじ」と述べるなど、下界の人間である娘が鬼神に苛まれることは仕方のないことと考えており、父である鬼に苦しめられるであろう娘を心から心配している絵巻系の天稚御子とは異なった設定となっている。人間の住む下界を汚れたものとするのは、冊子系の一貫したスタンスであるが、天界に訪ねて来るよう言い残した御子自身が、月を隔てて会おうと提案する冊子系の本文は、やはり不自然な展開であることはいなめないように思う。

次に、難題を逃れた方法についてみよう。

【例6】

〈絵巻系〉天稚御子に、「これをばいかがすべき」といひあはすれば、我が袖を解きてとらせて、「天稚御子の袖、〱、といひて、ふれ」と教へければ、そのままにふりければ、つとめては野へ出で、夕さりは牛屋へ入る。千頭の牛、なびきたり。（一七頁）

〈冊子系〉牛屋の前にて、泣き沈み給ふ。・・・「まことや、聞くことあり。天稚御子とだに唱ふれば、よろづの障碍を免るると、聞こえけんものを」とて、牛屋の前にて「天稚御子」と唱へ給へば、千疋の牛ども、野辺に出で思ふままに草をはみて、また、もとの牛屋に立ち帰りける。・・・明け方になりければ、・・・御子帰らせ給ふて、「・・・また暮れなば、鬼神来るべし。その時、この袖を持ちて、憂きことあらむ折節は、天稚御子といひつつ、三度ふり給へ。・・・（五二四～五二五頁）

絵巻系では、千頭の牛を飼えという最初の難題の時から、娘は天

稚御子に助けを求め、御子から「袖」を授けられ、「袖」をふりながら「天稚御子の袖」と唱えて難を逃れる。冊子系では最初の難題の折には、娘は「天稚御子とだに唱ふれば、よろづの障碍を免るる」と耳にしたことを思い出し、「天稚御子」と唱えて難を逃れる。その夜、娘は御子から「袖」を授けられて「天稚御子と言ひつつ三度ふり給へ」と教えられ、以後は「袖」を使って難を逃れる。しかし、「袖」がなくとも「天稚御子」と唱えるだけで万の障碍を逃れることができるのなら、御子の「袖」は必要ないのではないか。冊子系では、天稚御子は昼は忉利天にいるが、日が暮れると「一天」下がった所に出かけると設定されており、御子の留守中に鬼神がやってきて娘に難題を課す。最初の難題が課された際に、別の所にいる御子から「袖」を授かることは物語の設定上不可能だったのだろう。その結果、冊子系では、「袖」があってもなくても難を逃がれることができるという曖昧さ、あるいは矛盾を生じることになったと思われる。

なお、〈天稚彦草子〉の難題については、『古事記』において大国主命が須勢理毘売と契り、娘の父である須佐能男命より難題を課される場面の影響が松本隆信氏[21]により指摘されている。大国主命は「蛇の室」「百足と蜂の室」に閉じ込められるが、須勢理毘売から授かった「領巾」をふって難を逃れる。「領巾」は女性が身につけるものであるため、〈天稚彦草子〉では御子の「袖」を呪宝としたと考えられるのであり、「袖」は難題を逃れるためになくてはならない存在として設定されている。ちなみに、〈天稚彦草子〉でも、娘が「百足」や「蛇」の倉に閉じ込められるという難題が課されており、大国主命の場合と共通する。

天の川が誕生したいきさつは、絵巻系と冊子系でまったく異なる。

【例7】

〈絵巻系〉「しかるべきにこそあるらめ。もとの様に、住みあはむことは、月に一度ぞ」といひけるを、女房、あしく聞きて、「年にひとたびと仰せらるるか」といへば、「さらば、年に一度ぞ」とて、瓜をもちて、なげうちにうちたりけるが、天の川となりて、七夕、ひこ星とて、年に一度、七月七日に逢ふなり。（一八頁）

〈冊子系〉ただ、月を隔てて七日〳〵に、あひたてまつらん」と契りて、西、東に別れ給ふ。姫君、きこしめし「・・・別れて、一夜だに明かしかねつる我がなかを、ひととせ一度あはん、とのたまへば、いかに」とて、泣き給へば、思ひの涙、雨となり、恋の中川、身も浮くばかりに水出でて、をのづから、川を隔ててはしける。今の天の川、これなり。（五二九頁）

絵巻系では、天稚彦の父の鬼が、瓜を投げつけたところ、天の川となって二人を隔てる。冊子系では、娘が一夜でさえ逢えないのはつらいのにと、天稚御子を思う涙が雨と降って恋の中川となって二人を隔ててしまう。絵巻系では、瓜が割れ中から水があふれ出るという設定だが、難題求婚型の話型は七夕由来譚との結びつきが強く、瓜を縦に切ってはいけないと言われたのに縦に切ってしまったために水があふれ出して天の川になったり、瓜を食べてはいけないと言われていたのに瓜を食べてしまい水があふれ出て天の川になるなど、瓜と天の川誕生を結び付けた昔話も少なくない。[22] 一方、娘の涙があふれて川になったとする冊子系は、古今集以来、和歌にも詠まれている「涙川」[23]と同じ発想によるといえるだろう。

なお、この場面の絵巻系の図様は、〈図5〉にみえるように、画面右端に父である鬼が右手を前方に差し出し、足を前後に踏ん張り、今まさに瓜を投げつけたように描き出される。鬼の手の延長線上には割れた瓜によって天の川が誕生したとおぼしく、瓜が浮かぶ天の川が描かれ、その天の川に隔てられて右側にたなばた（娘）、左側に彦星（天稚彦）が描き出されている。冊子系でも赤木本・中之島本・京大本では、天の川に隔てられて右に娘、左に天稚御子が描かれているが、赤木本・中之島本では画面右側に鬼の姿も描かれている。中之島本では鬼の右手が腰にあてられているのに対して、赤木本では鬼の姿が〈図6〉のように、「右手を大きく開き、何かを投げたようなかたちにあらわされている」ことから、大月千冬氏[24]は赤木本が冊子系のなかでは最も絵巻系の図様を踏襲しているといわれた。しかし、娘の涙で天の川が誕生したとする冊子系本文との関係から考えるならば、鬼が瓜を投げつけ天の川が誕生したという絵巻系の図様が不適当であるのはいうまでもない。天の川を描いた冊子系の中之島本・京大本に瓜は描かれておらず、赤木本でも瓜の図はなく冊子系本文との対応を考えての改変と思われるが、最も絵巻系の図様に近い赤木本は、逆に最も冊子系本文にふさわしくない図様となっているともいえよう。冊子系本文でありながら絵巻の形態と絵巻系の図様をもつ赤木本の性格、および冊子系諸本における赤木本の本文の位置づけについては改めて検討しなければならない。いずれにせよ、赤木本に残された鬼の図様は、〈天稚彦草子〉の天の川誕生の場面が、もともとは父である鬼が投げた瓜によって誕生したとする絵巻系の本文であった可能性が高いことを教えてくれる。

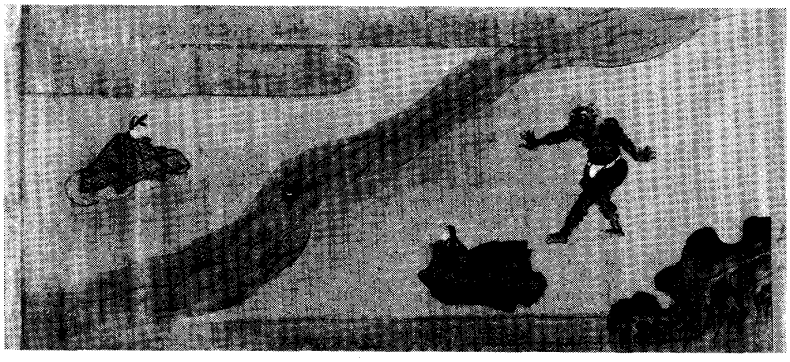

図5　サントリー美術館蔵

絵巻系をもとに冊子系が新しい要素を加えたり、改変したものと推定される異同箇所が多数を占めるなかで、冊子系にはなく絵巻系のみが有する異同がわずかながらみえる。

【例8】

〈絵巻系〉かくても、日数ふる程に、この親、来たり。女をば脇息になして、うちかかりぬ。まことに、目もあてられぬ気色なり。「娑婆の人の香こそすれ。しはらくさや」とて、立ちぬ。

図6　赤木文庫旧蔵・安城市歴史博物館蔵

その後も、たび〳〵来たりけれども、扇、枕などにしなしつつ、紛らはしてありふるに、さや心えたりけむ、足音もせず、みそかに、ふと来たり。昼寝をしたりければ、え隠さで見えぬ。（一七頁）

天界にて娘と再会するものの、娘の存在が、父である鬼に知られたらどうしようと心配した天稚彦は、父が訪れる度に娘を「脇息・扇・枕」などに変身させる。この〈絵巻系〉の場面が〈冊子系〉にはない。【例6】のなかで、〈天稚彦草子〉の難題が、『古事記』の大国主命が、舅の須佐之男命から難題を課された場面と重なることを述べたが、【例8】の絵巻系の娘を変身させる場面も、『古事記』『日本書紀』において須佐之男命が八岐大蛇を退治する時、妻となった櫛名田比売を「ゆつ爪櫛」に変身させ自身の角髪に刺したという一節を連想させ、ファンタジックな場面である。絵巻系の神話指向のひとつのあらわれと位置づけることもできるだろうし、見方を変えれば、冊子系が神話と重なる要素を排したものともいえよう。

以上、絵巻系と冊子系の本文の異同箇所について見てきたが、冊子系が、絵巻系の後に作り出された物語であることが改めて確認できたと思う。娘が昇天する方法は絵巻系にあるように「一夜ひさご」が本来のものであっただろう、難題譚は親が婿あるいは嫁としてふさわしいかを試すものであり、難題を課すのは絵巻系の「父」が自然であろう、難題を免れるために「天稚御子の袖」は、絵巻系のように最初から最後まで必要ではないか、天の川の誕生は、絵巻系のように、父である鬼の投げつけた瓜が割れて水があふれるのがもとの形であることを、赤木本の絵は語ってくれるのではないか。赤木本の二つの絵は、絵巻系と冊子系の本文の関係を解きあかすためのヒントを与えてくれる。冊子系本文には、後から書き加え、書き改めたことによる不自然さや曖昧さや矛盾があることもわかった。

冊子系では、「変はらぬ契り」を求めた娘が、天人との結婚によりその願いを叶えるという物語として設定されており、細い声で話す美しい「くちなは」の描写などにもこうした冊子系の物語の視点が反映されていた。冊子系の難題は、父によって課せられたものではないことから、不自然な印象を受けたが、冊子系では、いわゆる難題求婚譚ではなく、人間である娘が、天人と結婚するための通過儀礼的なものとして描かれているといえるのかもしれない。冊子系では、御子が娘に、あなたは不浄の身ゆえ「悪魔の障碍」は逃れられないが、七日[25]が過ぎたら「清浄の身となりて、天人の位」に至るだろうと語っているが、この発言も、冊子系における難題が、娘が天人となるためのものであったことをうかがわせる。冊子系本文にとって、新しい要素を物語に加え、あるいは読みかえて行く作業は魅力的で、ストーリーの展開に不自然さ、曖昧さ、矛盾が生じていることなど、些細なことだったのかもしれないが、粗削りの印象はぬぐえない。絵巻系は、各地に伝わる民間説話や神話と共通する要素が多いが、冊子系では、そうした昔話などと共通する要素をあえて書きかえているかの感もある。「一夜ひさご」と「煙」の対立も、「瓜」が割れて誕生した天の川と「涙」があふれて誕生した天の川の対立も、娘を「脇息・扇・枕」に変身させる箇所が冊子系にはないのも、冊子系が昔話や神話に見える発想から脱却しようとしているように思えなくもない。

表現の異同についても触れておきたい。天の川によって隔てられた二人の呼称を見ると、絵巻系では「七夕・ひこ星」[26]とあるが、冊

子系では「いまの世のひこぼしと申すは、あめわかみこ、おたなばた、これなり。ひめ君はおりひめとて、めたなばたと申すなり」とある。絵巻系が「七夕」を「彦星」に対応する存在と解しているのに対して、冊子系では「七夕」を男女共通に用い、「お七夕」「め七夕」と呼び分けている。そもそも「たなばた」とは棚機と記し、機織りの機械あるいは機を織ることをいったようだが、機を織る女性をもいうようになる。それが中国の七夕伝説と結びつき、織女星を「たなばた」と呼ぶようになる。源氏物語でも「たなばた」は織女星の意で用いられており、牽牛星をさす「彦星」に対応する存在である。つまり「たなばた」が織女星を意味する絵巻系は伝統的な表現を踏襲していることになる。筆者は前稿[27]において、絵巻系「夕つづ」に対する冊子系「夕みやうじやう」の異同について検討した。絵巻系の「夕つづ」は夕方の空に見える金星をさす語で、平安時代以来の伝統的な表現であるが、「明星」は本来、夜明けの金星に限定された語である。冊子系「夕みやうじやう」は、「明星」が夕方・夜明けに関係なく金星の意として用いられるようになった時代の用法を反映するものであり、江戸時代の辞書の記述と重なることを指摘した。同様に、女性に限定されていた「七夕」が、女性・男性を問わず用いられている冊子系の本文も、絵巻系より後の本文を伝えていると思われる。他にも、絵巻系では「きこゆ（補助動詞）」、冊子系では「まゐらす（補助動詞）」「たびたまへ」「まします」が用いられ、係り結びの法則の乱れも冊子系に目立つ[28]。絵巻系の本文の方が、冊子系より伝統的な表現・語法を継承しているといえよう。この傾向は、絵巻系の方が冊子系より古い本文を伝えるという、本稿における両系統の異同箇所の検討結果と重なりあう。

四、「乾陸魏説話」と絵巻系・冊子系との関係

〈天稚彦草子〉が、中世の『古今集注』付載の乾陸魏説話と重なることは、はやく三谷栄一氏[29]の指摘による。そこでは、中国の乾陸魏長者の話として語られる。三谷氏はこの『古今集注』を藤原定家の子である為家によるものと解し、〈天稚彦草子〉は鎌倉初期に伝えられていた乾陸魏説話をもとにしていると論じられた。ところが、この『古今集注』は為家によるものではなく、「為相注[30]」あるいは「大江広貞注[31]」とよばれるもので、奥書には永仁五年（一二九七）と記されている。しかし、片桐洋一氏[32]によると、奥書には誤りがあり信頼度が問われることから、その成立も永仁五年以降いつまで下るかわからないという。『古今集注』の成立年代が不明である以上、両者の前後関係は自明とはいえなくなってしまったが、『古今集注』は中世の注釈書でもあり、〈天稚彦草子〉の絵巻系と冊子系との関係を考えるうえで、乾陸魏説話と両系統との距離をはかることは大切だろう。

調査をした結果、乾陸魏説話には、後述するように乾陸魏の独自異文も認められるが、それらを別にすれば、絵巻系の本文にきわめて近いことがわかった。たとえば、前掲の【例1】【例2】をはじめ、冊子系は、絵巻系にはない本文を有する場合が相当数あるが、乾陸魏も冊子系の本文を持たず、絵巻系と重なる。また乾陸魏の本文が絵巻系と共通して、冊子系と対立する箇所もみえる。【例3】の絵巻系「おほきなるくちなは」と冊子系「いつくしきくちなは」が対立する例では、乾陸魏はただ「大蛇」とあり、絵巻系と重なる。【例6】の娘に難題を課すのも、絵巻系同様、乾陸魏でも彦星の「父」にあ

たる梵天王である。【例7】の天の川の誕生の由来も、乾陸魏も絵巻系と同じく「瓜」が割れて水があふれたためとする。また、「瓜」を力まかせに投げつけることをあらわす、絵巻系の「なげうちにうちたりける」という表現まで、乾陸魏も「なげうちにうち給へり」となっている。絵巻系「七夕・ひこ星」と冊子系「め七夕・お七夕」の対立でも、乾陸魏は「七夕・彦星」とあって絵巻系と重なる。

その他、絵巻系と乾陸魏との近さをうがわせる異同を二例示そう。

【例9】

〈乾陸魏〉玉の装束に玉のかぶりしたる、すべて、この世の人ともおぼへぬが、出で来て、かのくちなはのからをばかいまきて、さううちさして、この女と夫婦となりて、めでたく頼もしともいふはかりなし。

〈絵巻系〉直衣きたる男の、まことにうつくしきが、走り出でて、かはをばかひまとひて、小唐櫃に入りて、二人、臥しぬ。おそろしさも忘れて、語らひ臥しぬ。（一四頁）

〈冊子系〉異香薫じて、光かがやくと見えしが、衣冠正しくしたる雲の上人、出で給ふ。姫君、顔ふりあげて見給ふに、この世ならぬ風情なれば、いつしかおそろしきことも忘れはて、恋慕の思ひをなし給ふ。かくて、くちなはは、また川波に沈みければ、雲の上人は、釣殿にとどまりて語らひ臥しぬ。（五一六頁）

注目してほしいのは、蛇から現れた男（天稚御子）とその蛇との関係であるが、絵巻系「かはをばかひまとひて」・乾陸魏「からをばかいまきて」は、いずれも脱皮した蛇の皮（殻）を連想させる。男は、蛇の皮（殻）を身体にまとわりつかせている。冊子系では、蛇は川波に沈み、「雲の上人」（天稚御子）は釣殿にとどまったとして、蛇と御子を別のものとしているが[33]、絵巻系・乾陸魏では、蛇を切ることによって蛇そのものが、皮（殻）だけを残して、男性に姿を変えたとよめる。絵巻系・乾陸魏のプロットは、蛙を壁に強く投げつけると魔法が解けて、蛙が王子様になったというグリム童話[34]も連想され、ファンタジックな印象が冊子系より強い。

次の例は、天稚御子が、天上界にでかける時に、決して開けるなと言い置いた唐櫃を、姉たちが開けてしまう場面である。

【例10】

〈乾陸魏〉この朱唐櫃をばゆかしがれど、「さるやうありて、開くまじきものにて侍る」とて、執念く開けぬを、・・・猶すぐれたる宝のあるにこそとおぼつかなく、いぶかしさに、「鍵はいづくにあるぞ」と、こそぐりていはせんとすれども、・・・姉、力つよきものにて、錠をねぢ破りて開けて見るに、

〈絵巻系〉この「な開けそ」といひし唐櫃を、「開けよ。見む、〈」と、いひあひたるに、「その鍵、知らず」といへば、かまへて、「鍵とり出でよ。など、隠すぞ」と、姉どもこそぐりけるに、鍵を袴の腰に結ひつけたりけるが、几帳にあたりて音のしければ、・・・そうなく開けてけり。（一五頁）

〈冊子系〉ここにまた、うつくしき箱ひとつあり。・・・蓋を開けんとし給へば、姫君、「それこそ、忌み深き箱なれば、たやすく開けんことこそおそれなれ」とて、しば〈とどめ給へども、「何の障りかあるべき。いかばかり、うつくしきものの入りたるらん」とて、蓋押し開けて、見てあれば、・・（五一八頁）

ここでは、唐櫃に「鍵」がかけられているかいないかが、冊子系と対立するが、絵巻系・乾陸魏では「鍵」がかけられているという点で共通するばかりか、その鍵を捜し求めて、姉たちが娘を「こそぐる」（くすぐる）という設定までもが重なる。もっとも、娘をくすぐった結果、鍵がどうなったかについては、絵巻系と乾陸魏では異なる。

以上のように、乾陸魏説話は絵巻系と重なる箇所が散見し、絵巻系との近さをうかがわせる。この結果は、冊子系の本文の孤立性を際立たせる。絵巻系が乾陸魏説話と共通する箇所が多いのは、絵巻系本文が冊子系に比して中世の物語としての性格を伝えていることを、裏付けるものといってよいだろうと思う。また、絵巻系が冊子系に先行する本文であるという筆者の推定と重なる結果ともみなせよう。

ところで、乾陸魏は、絵巻系・冊子系のいずれとも大きく異なる独自な箇所をもつ。【例4】の娘が昇天した方法は、乾陸魏では、娘が飼っていた二羽の鵲に乗ってであり[35]、絵巻系・冊子系のいずれとも異なる。また、娘に課された難題も、乾陸魏では、娘には「天の羽衣を織る」という、絵巻系・冊子系にはない課題となっていること、また、絵巻系・冊子系では、娘に課された「牛を飼う」という課題が、彦星に課せられている点で異なる。さらに、乾陸魏では観音信仰の影響をうかがわせるものとして、蛇との結婚に娘が観音像、観音経を持って行くこと、大蛇が登場する場面で娘が観音経を読むこと、娘が難題をクリアする方法が「仏の加護」となっていることが指摘できる。娘の天界訪問の場面で、絵巻系・冊子系が星たちに天稚御子の居所を問うているのに対し、乾陸魏では天人に彦星の居所を教えてもらっている。ちなみに、冊子系では天稚御子の居所を、暁の明星に教えてもらったのに、再度天人にも問うという執拗さとなっており、この異同に限定すれば、冊子系の本文は絵巻系と乾陸魏とを足し合わせたかのようである。

乾陸魏説話は、以上のような独自異文を有しているものの、「かいまきて・かひまとひて」、「こそぐる」、「投げうちにうつ」といった表現の重なり方をはじめ、〈天稚彦草子〉絵巻系と近しい関係にあるのは明らかである。両者の関係はどのように考えたらよいのだろうか。〈天稚彦草子〉に限らず、室町時代の物語と『古今集注』に引かれている説話が共通する例が、片桐洋一氏[36]、徳田和夫氏[37]、石川透氏[38]らによって多数指摘されている。中国を舞台とする説話も少なくない。〈天稚彦草子〉も、『古今集注』に引用されるような、知識階級の人々に知られていた説話が土壌となって生まれた、室町時代の物語のある作品群のひとつととらえるのが自然ではないか。とはいえ、独自異文の存在や、【例9】【例10】の本文などからもうかがえるように、絵巻系と乾陸魏との重なりと差異は、絵巻系の本文が乾陸魏を見ながら作り出されたというような、両者の間に書承による直接的な影響関係があったとは認めにくいように思われる[39]。それよりも、古今集の講説の場で語り伝えられるような物語として、絵巻系の作者も聞き知っていた物語が基盤となって作り出されたものと考えるのがふさわしいのではないか。その物語は、絵巻系と乾陸魏説話との共通項を有した物語であり、あるいは乾陸魏に近い内容だったかも知れないが、〈天稚彦草子〉絵巻系の根っことなるような物語とでもいえようか。その根っこの物語に神話的要素や昔話的要素が絡まって誕生したのが〈天稚彦草子〉絵巻系の物語であると

おおよそ捉えることができるのではないか。[40]

五、絵巻系と冊子系の享受者層

片桐洋一氏[41]は、乾陸魏説話のような話が『古今集注』に見えるのは、古今集が人々が集まった場で講説された結果であろうとし、古今集の享受者と室町時代の物語の享受者が同レベルであったとする興味深い指摘をしている。乾陸魏説話と共通する箇所の多い絵巻系の享受者に、知識人階級が含まれていたことは、絵巻系のベルリン本の詞書が「当今宸筆」と奥書にあるように、今上天皇の筆になることからも想像される。絵巻系は神話や昔話と共通する要素を多数有しており、なかでもベルリン本は、絵師土佐弾正藤原広周による木目込みの雛人形を思わせる可憐な画風とあいまって、ファンタジックな佳品となっている。

一方、冊子系は、「変はらぬ契り」を求めた娘が、天人との結婚によりその願いを叶えた物語として設定されているといえよう。神話や昔話と共通する要素をあえてなくしたり改めたりしたような箇所がみられるのも、物語が指向する方向が、絵巻系とは異なることをうかがわせる。[42]冊子系では、この「変はらぬ契り」を求めた娘について、「姿かたち」が二人の姉よりすぐれ、「心ざま」の賢い、「仏の道」にも熱心な、「孝行をもと」（五一四頁）[43]とした娘であったと、具体的な人物造形を行っている。絵巻系では、この三番目の娘について「一のかなし子」（一四頁）と、父母が一番可愛がっていた子であったとするのみであるのとは対照的である。[44]冊子系が語る、容姿のすぐれた、賢く、信心深く、親孝行の女性とは、ひとつの理想的な女性像ともいえよう。こうした冊子系の主人公像は、冊子系の物語の設定とあいまって、女性の享受者を意識したものといえるように思われる。ちなみに、冊子系に頻出する「孝行」という語は、江戸前期に刊行された、「女性を対象とした啓蒙教訓書」としての仮名草子のなかにも多数見出されるという。[45]

三番目の娘が蛇との結婚を承諾した理由が、絵巻系では、父母の命がとられるくらいならばという素朴な率直な思いが語られていただけであったのに対して、冊子系では、命は定めないものであるから、父母子孫のために命を失うのならば何の恨みもないと理路整然と語っているのも、信心深くしっかりものの親孝行の娘の発言として、模範的な回答であるともいえよう。乾陸魏は絵巻系と重なることが圧倒的に多いのだが、この例では、乾陸魏でも、誰も一度は死んでしまうもの、私一人が死ぬことで父母姉妹が助かるのならば、かえって功徳となるであろうと、冊子系に近い内容を有しており、冊子系の内容が広く受け入れられる素地があったことをうかがわせる。

〈天稚彦草子〉の絵巻系と冊子系の物語は、以上、見てきたように、物語られた世界にも、享受者層にも変化がうかがえる。広い意味では、乾陸魏説話も〈天稚彦草子〉の諸本のひとつといえなくもないが、乾陸魏には和歌が一首もない点で区別されるだろう。乾陸魏説話が中国の説話として引用されているからには、和歌がないのが自然であるともいえようか。絵巻系には、和歌は「あふこともいさしら雲の中空にただよひぬべき身をいかにせむ」の一首がみられるのみであるが、冊子系の静嘉堂本・中之島本・京大本では共通して四首の和歌を有する。しかしながら、冊子系と絵巻系とではまっ

たく別の和歌となっている。[46] 石埜啓子氏は、[47]『狭衣物語』『住吉物語』『夜の寝覚』『とりかへばや』をもとに、散文における表現の改変は「異本」、歌の改変にまで及ぶものを「改作」とするという興味深い考えを述べている。〈天稚彦草子〉は小品であり作中歌の数そのものが少ないうえ、ジャンルも時代も異なるため同列に考えることには慎重でなければならないだろうが、絵巻系と冊子系とではモチーフは共通するものの、味わいは別の物語のようでさえあること、絵巻系から冊子系へと展開した異同箇所が確認できること、さらに作中歌が一首も重ならないということは、〈天稚彦草子〉の二系統の本文の関係は、異本というよりも改作本と呼んだほうがより実態に近いといえるようにも思う。[48] モチーフは共有しながらも、物語は自由にふくらみ、不自然さや曖昧さや矛盾をかかえたままに新しい物語が作り出されていく。そして、この自由さこそが、室町時代を中心に生み出された短編物語の享受のひとつのあり方といえるのではないだろうか。

【注】

(1) 松浪久子氏「御伽草子『七夕』と昔話」(「大阪青山短大国文」三号、一九八七年二月)による。松浪氏には他に「御伽草子『七夕』の展開——本文と絵の関連から——」(「大阪青山短大国文」四号、一九八八年二月)、『七夕』(『和泉書院影印叢刊・54』一九八六年四月)がある。

(2) 勝俣隆氏「室町物語に於ける挿絵と本文の関係について」(『説話論集・八』一九九八年八月)による。勝俣氏には他に「中世小説『あめわかみこ』の七夕系本文二系統の新旧に関する一考察——絵と本文の齟齬を通して——」(「愛文」二三号、一九八七年九月)、「天稚彦物語〈大蛇怪婚系〉」(『お伽草子事典』東京堂出版、二〇〇二年)等がある。

(3) 伊東祐子「〈天稚彦草子〉の二系統の本文をめぐって——絵巻系から冊子系へ——」(「国語と国文学」九六四号、二〇〇四年三月)による。

(4) 絵巻系諸本の影印と翻刻を示す。秋山光和氏「天稚彦草紙絵巻をめぐる諸問題——上巻図様の新出を機に——」(「国華」九八五号、一九七五年十二月)には上巻・アンベルクロード本(専修大本)下巻・ベルリン本の影印と翻刻を載せる。サントリー本は「新修日本絵巻物全集・別刊2」(角川書店)に影印と翻刻があるが、ベルリン本の影印も載る。専修大本は古典籍影印叢刊刊行会による複製と翻刻がある。絵巻系諸本は本文も図様もほぼ共通するが、サントリー本はベルリン本・専修大本に比して、娘の衣装の模様が異なっていたり、すばる星の数が異なるうえ箒を手にするなど独自な図様もみえる。なお、サントリー本は、サントリー美術館にて調査・撮影の機会を与えていただいた。

(5) 秋山光和氏「天稚彦草子絵巻をめぐる諸問題」(注4に同じ)による。宮次男氏「天稚彦草子絵巻」(「新修日本絵巻物全集・別刊2」注4に同じ)は、絵の作風から十五世紀の中葉までは遡り得るが、詞書に欠文があり、ベルリン本は原初本ではなく転写本ではないかとされた。絵巻系に先行する本文があったと筆者も思っている。

(6) 静嘉堂本は「室町時代物語大成・八」に翻刻があるが、紙焼き写真をあわせて用いた。

(7) 中之島本は「和泉書院影印叢刊・54」(注1に同じ)に影印がある。翻刻は、勝俣隆氏「大阪府立中之島図書館蔵『七夕』の翻刻及び解題」(「新居浜高専紀要人文科学編」20、一九八四年一月)がある。

(8) 京大本は「京都大学蔵むろまちものがたり・七」(臨川書店)に影

印と翻刻がある。

(9) 赤木文庫旧蔵本は「室町時代物語大成・八」に翻刻がある。赤木文庫旧蔵本は、現在は安城市歴史博物館所蔵であるが、本稿では、便宜的に赤木本と呼ぶことにする。図録『七夕之本地絵巻　たなばたのほんじ』（安城市歴史博物館）に影印と翻刻がある。なお、安城市歴史博物館にて調査・撮影の機会を与えていただいた。

(10) 京都大学蔵『古今集注』は「京都大学国語国文資料叢書・四八」（臨川書店、一九八四年十一月）による。

(11) 宮内庁書陵部蔵『古今集注』（所蔵番号五五七・八六）は、実見による。

(12) 国文学研究資料館蔵初雁文庫（乙）本『古今和歌集注』（所蔵番号一二・二〇八）のマイクロフィルムおよび紙焼き写真による。

(13) 拙稿（注3に同じ）にも絵巻系と冊子系の本文の異同箇所について検討している。参照されたい。

(14) 冊子系では、長者への手紙をもった蛇があらわれる場面に先立ち、「その心（娘の願い）、天理にや叶ひけん、不思議なることこそ出で来たれ」（五一二頁）とあり、参考になる。

(15) 網野善彦氏「高音と微音」（『ことばの文化史　中世1』平凡社、一九八八年）による。

(16) 娘の昇天を描いた絵巻系の絵の図様の説明は、秋山論文（注4に同じ）を参考にしている。

(17) 三谷栄一氏『物語文学史論』（有精堂出版、一九五二年）、関敬吾氏『昔話の歴史』（至文堂、一九六六年）、松浪久子氏「御伽草子『七夕』と昔話」（注1に同じ）、『瓜と龍蛇』（「いまは昔むかしは今・1」福音館書店、一九八九年）等による。

(18) 冊子系のうち静嘉堂本、京大本、仙台市博物館蔵本、パリ国立図書館蔵本の挿図に「夕顔の花」は描かれず、「夕顔の花」が描かれているのは赤木本と中之島本である。大月論文（注19に同じ）の挿図参照。

(19) 大月千冬氏「『天稚彦草子』長文系テクスト絵画化における図様の展開過程」（「奈良絵本・絵巻研究」一号、二〇〇三年九月）による。なお、美濃部重克氏「室町物語の挿絵小考」（「南山国文論集」三号、一九七八年十二月）においても、この場面の絵巻系と赤木本について論じている。

(20) 関敬吾氏『昔話の歴史』（注17に同じ）、松浪論文（注17に同じ）等による。

(21) 松本隆信氏「天稚彦草子」（「新潮日本古典集成」所収）の頭注による。

(22) 市岡真理氏「天稚彦物語の生成」（「国文目白」二六号、一九八七年二月）、『瓜と龍蛇』（注17に同じ）による。

(23) 「涙川」の例は、「涙川なにみなかみをたづねけむ物思ふ時のわが身なりけり」（古今集・恋一）「涙川水まさればやしきたへの枕の浮きてとどまざるらむ」（拾遺集・雑恋）等がある。

(24) 大月論文（注19に同じ）による。冊子系本文でありながら、絵巻の形態と絵巻系の図様をもつ赤木本は、絵巻系と冊子系の中間に位置する形となっており、大月論文では、冊子系の絵画化の初期的様相を伝える作例と位置づけられている。赤木本は、冊子系の本文と絵巻系の図様が接触した結果生まれた可能性が大きいものの、冊子系諸本のなかでは赤木本は独自な本文を有する場合もあり、冊子系諸本における赤木本の本文の位置づけを含め、赤木本についてはさらなる検討を要する。

(25) 静嘉堂本では、「一七日」と記されているが、中之島本・京大本・赤木本では「七日」とあるのでそれによる。ただし、「一七日」は1×7

の意とも解されるか。

(26) 天稚御子が彦星と結びつけられた理由について、出雲朝子氏「『天稚彦物語』と七夕二星」(『青山学院女子短期大学紀要』四二輯、一九八八年十一月)では、『古事記』『日本書紀』『古今集』などについての知識階級の人々の中世的解釈によることを明らかにされている。

(27) 拙稿(注3に同じ)第四章による。

(28) 拙稿(注3に同じ)第四章でもとりあげている。参照されたい。ちなみに、「きこゆ(補助動詞)」は平安時代に多用、「まゐらす(補助動詞)」は中世以降多用された。「たびたまへ」も中世以降、謡曲などで慣用句的に用いられた。「まします」は中古では神仏・皇族などに限定して用いられたが、中世には多用され敬意の度合いが低くなっていったと思われる。冊子系では、天稚彦だけでなく末娘・父母の行為にも用いられている。

(29) 三谷論文(注17に同じ)による。

(30) 「為相注」の呼称は、『古今集注』(注10に同じ)の解題をはじめ用いられている。

(31) 「大江広貞注」の呼称は、片桐洋一氏「中世古今集注釈書解題・一」(赤尾照文堂、一九八一年)による。

(32) 片桐氏解題(注31に同じ)による。

(33) 絵巻系の図様には、激しい波の中から現れた大蛇が描かれ、大蛇の頭の裂け目に天稚御子の姿が描き出されている。大蛇が川波に沈み、天稚御子が釣殿に残ったとする冊子系の本文はこの図様の解釈によったものと思われなくもない。

(34) グリム童話「蛙の王様」による。グリム童話はドイツの民話集である。

(35) 市岡論文(注22に同じ)では、娘が鵲によって昇天する場面は、『古今和歌集序聞書 三流抄』中にある「遊子伯陽」の説話と重なることを指摘している。また、市岡氏は、乾陸魏が〈天稚彦草子〉の成立を促したとは考えにくいとされる。

(36) 片桐洋一氏「古今集における和歌の享受」(『文学』四三号、一九七五年八月)による。

(37) 徳田和夫氏「物語草子の世界」(『岩波講座 日本文学史・六』一九九六年)、徳田氏「物語の変貌——お伽草子の説話学的展望—」(『お伽草子研究』三弥井書店、一九八八年)等による。

(38) 石川透氏「室町物語における『古今和歌集』享受」(『室町物語と古注釈』三弥井書店、二〇〇二年)による。

(39) 石川論文(注38に同じ)でも、絵巻系本文と乾陸魏説話の冒頭部分を比較し「書承による影響ではなく、口で伝えた話を書き留めた感が強い」とされる。

(40) 絵巻系本文には若干欠けていると思われる箇所があり、現在伝わる絵巻系本文に先行する本文があった可能性がある。拙稿(注3に同じ)を参照されたい。なお、蛇が長者の娘を要求する場面で、絵巻系の「三人の娘賜べ」は舌足らずで、乾陸魏や冊子系のように三人の娘のうちの一人とするのが自然だろう。また、姉たちが妹のもとを訪れる場面の絵巻系「此の家に来て、めでたき事を見むとて来あひたり」も、先行本文からの抄出による不自然な文脈のように思われなくもない。内容的にも、姉たちは妹の幸せな結婚生活を知っているかのような書きぶりとなっているが、絵巻系には、姉たちがどのようにして妹の暮らしを知ったのか記されておらず、不自然さが残る。先行本文からの抄

出によって欠けてしまった可能性もあるだろう。

(41) 片桐論文（注36に同じ）による。室町時代物語を男性貴族が享受したことは、後花園天皇の父・後崇光院の『看聞日記』や三条西実隆の『実隆公記』にみえる。

(42) 松浪論文（注17に同じ）では、絵巻系を「神話・昔話志向的」、冊子系を「物語的」であるとされる。

(43) 三番目の娘についての引用は、静嘉堂本によるが、中之島本も同文である。京大本は若干異なり、「ほとけのみち」の代わりに「ぶつじん（仏神）をたっとみ」とある。赤木本は「心ざま、いふ（優）にやさしく」とあるうえ、「ほとけのみち」以下の説明はみえない。ただし、「仏の名」をとなえたり、「孝行」のために命を捨てるといった叙述がみえ、冊子系諸本と三番目の娘の描き方は共通している。

(44) この異同に関しては、拙稿（注3に同じ）でも述べているので参照されたい。

(45) 大月千冬氏「『天稚彦草子』絵画化の展開過程――赤木文庫旧蔵本を中心に――」（『美術史研究』第三十九冊、二〇〇一年十二月）による。

(46) 橘りつ氏「東洋大学図書館蔵『天稚彦』（仮題）小考」（『文学論藻』六二号、一九八八年二月）でも、絵巻系と冊子系とで和歌が共通しないことに注目されている。

(47) 石埜啓子氏「改作本『夜の寝覚』を中心に」（『中世王朝物語を学ぶ人のために』世界思想社、一九九七年）による。ただし、『夜の寝覚』『とりかへばや』では、改作本において作中歌が改変されているものの、原作の代表作とおぼしき一首ないし二首は、原作のままの形が残されているという。

(48) 冊子系の赤木本は八首の作中歌をもつが、冊子系の静嘉堂本・中之島本・京大本の三本が共通する四首は、赤木本も共有しており、冊子系諸本の和歌を改変した例は認められない。赤木本のみにある四首は、両親との別れの場面にみえるもので、冊子系諸本が一首であるのに対し、赤木本は、その一首とともにさらに四首を加えている。こうした赤木本の異同状況は、『住吉物語』諸本における和歌の異同状況に類似をみせており、赤木本と冊子系は、異本の関係にあることをうかがわせる。

正　誤　表

p258 (33) 英文タイトル中（表紙英文タイトル含む）

誤	正
Develoment →	Development